

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	血で書いた寫經 : 小説
Author(s)	小川, 久雄
Citation	龍南, 178: 133-135
Issue date	1921-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7802
Right	

血で書いた寫經

小川久雄

春は宇宙のすべての生命の躍動する時である。

すべてが光のうちに生れ、光のうちに生存し、光のうちに未來に進まうといふ時である。

太陽は若やかに照り、大空は艶めきかゝやき、地上はゆはびかに麗はしさを増すのである。一もとの小草も、春を知つて萌え出で、新しきいのちによみがへり、一河の流れも、春のしらべを奏でて、春の宇宙のいのちと調和し融合するのである。

萬籟は坤然一眞理、宇宙の大法と一致するのである。

おゝこの調和、この融合こそ、眞善美の元素となるものである。宗教も藝術も、その高調する根本源泉はひとへにこの調和融合に歸する外はないのである。

人がこの調和融合の大河に身を浮べる時、やがて神の殿堂、佛の聖殿に、おのづから達することを得るのである。

國に賢明な王者がゐて、初めて國が平穩太平に治められると全く等しく、一人間も心の宮殿に尊とき王者の即位を最も必要とするのである。

靈も肉もすべてこの王者によつて、善良に治められて初めて、一人間は眞の意義に徹することを得るのである。

抑もその即位の大禮は何に法^{のつぎ}るか、云ふまでもなく宗教の道によるのが最も適當である。

人間があるごん底につきあたつた時ほど、深く見つめ、深く考へる時はない。是を経験した最後のごんつまりに人間はある根底に達するのである。

そのとき初めて人生根本の意義に徹するに足る光りを見いだすのである。

これはただの凡人の眼に映^{うつ}つただけの人生とはちがつて、確乎たる地盤の上に動かない根底を据ゐるに足るものである。

宗教は是を信念と云つてゐる。

×

神、佛陀といふものをあまり尊とびすきてはならない。又自分をあまりにいやしめてはならない。

神を拜することは我を拜すること、思ひ、我を愛すること、神を敬ふこと、思ふべきである。

神も佛陀も自分を離れて存在しないといふ信念は新しい宗教の宣傳しやないところである。

生ける血をもつて、神聖な文字を書いた血書の寫經といふものがある。

いにしへの聖賢の示して呉れた宗教は即ち生きた人生を経験して生きた血を以て書いた信仰である。

眞にめざめた人生の縮圖である。

人が眞にめざめ、眞心の力のあらはれを信じ、眞剣な心で生活して行くところに、そこに血で書いた寫經の宗教が生れいづるのである。

×

蒼い大空を仰いで、かっやく太陽を、まともに見ることができるのは、獨り人類のみである。そこに人間の人間たる尊とさがあるのである。

生物のうちには、太陽どころか明^あるみをさへ知らない眼^めなしの魚さへある。光りと萬物とは密接な関係をもつてゐるのである。

人間も光りを慕ふことがなかつたら、眼^めなし魚とおなじく、一生涯、人生の光、宇宙の光を知らないで、めくらに等しい暗い知識で了ることであらう。

宗教はその光りのもどめかたを教へ示すものである。